

●「赤心」継がん

Dream

五代塾

GodaiJuku

Sinbun (新聞)

第33号

発行: Dream 五代塾

吹田市千里山西 5-14-17

発行責任者: 理事長 川口 建

五代友厚も立ち寄った

外曾祖父永見の家(下・最終回)

筆者の母の実家永見家は、新住友ビル左側の御霊筋を南に半道の淀屋小路迄と、柱から右へ1/3程度の方形の土地が約530坪あった。(本紙第28号参照)

五代友厚は晩年の明治17年、現在の日本銀行大阪支店の土地約1、500坪を購入して初めて豪華な自邸と弘成館を建築した。

Dream 五代塾顧問 曾野 豪夫

大阪永見商店

永見邸跡
現日本銀行

日本銀行大阪支店本館と新館群、及び新住友ビル辺りを北から南方面を俯瞰する。(1982年頃撮影)日本銀行は手前の堂島川と奥土佐堀川の中州に位置する。写真左端は御堂筋で土佐堀川に架かっているのが淀屋橋。また、写真中央奥の少し高いビルが新住友ビル、その右が旧住友銀行本店ビル

永見米吉郎(筆者の外曾祖父)は、長崎の永見商店主である兄傳三郎と、延べ一〇年間近く長崎に在勤した薩摩藩士五代友厚の後押しもあり、慶應二年(一八八六)独身二十七歳の時に長崎から大阪に進出して大阪永見商店を開店した。翌三年大政奉還が裁可され、十月王政復古の大号令が發布された。十二月末に五代は薩摩から神戸に到着した。明けて正月十一日神戸事件、二月十五日堺港事件と三〇日京都での英吉利公使パークス公使襲撃の三大涉外事件を新政府の立場で、英語が多少できる伊藤博文と共に解決に奔走した。九月、明治と改元された。五代はこれ以降長崎に戻ることはなかった。

翌明治二年(一八六九)、五代は下野して大阪で金銀分析所を設立した。米吉郎は自営の物産交易事業を行いつつ五代の筆頭(肝煎)執事としてその全ての事業開拓に協力した。(肝煎は複数いた)。四年廃藩置県により、新政府が接収した旧吉田藩の淀屋橋南詰め大川町の蔵屋敷を米吉郎は

買い取り、居宅兼事務所とした。大正四年の大阪市「地籍図」によると敷地約五三〇坪、建坪約八十六坪である。嶋田朝叔母によると一階に一

〇余室(約七十坪)、二階が八室(五十坪弱)あったことである。現在の住友ビルの北東の角部分である(本紙二十八号参照)。十年からは長崎で兄が創業した第十八国立銀行の大阪代理店業務も行った。二十六年銀行条例により翌年大阪支店が登記され、日清戦争を経て三十五年西区江戸堀通りに西支店が開設された。これはその界限に朝鮮と清国との取引業者が多かったためである。(当時十八銀行は朝鮮に三店舗を有していた。)

六年一月に発足した弘成館(鉱山事業)で米吉郎は総事として財務経理を担当した。この弘成館は社則から推測すると大阪で一番大きく、近代的な組織であり、又有能な青年に簿記、経済学等を教えた。米吉郎は長崎から十八歳の甥永見寛二(二代目)を呼び寄せて業務実習と研修を受けさせた。寛二は後年十八銀行頭取となり(大正五、十一年)、衆議院議員を二期務めた。その立派な邸宅は戦前高級旅館「諏訪荘」となり、平成二年(一九九〇)長崎出身の奇情な方が移築復元費一億三千万円の多くを負担して下さって諏訪神社の境内に移築された。

九年朝陽館(精藍事業)の設立にも米吉郎は五代の肝煎として深く関与した。翌年明治天皇が朝陽館に行幸された。米吉郎も五代に従って門前でお出迎えを行い館内の天覧にも供奉(べんぷ)した



長崎 永見傳三郎
第十八国立銀行初代頭取
五代友厚(父)の父
筆者の母(母)の父

ので、玉顔(ぎよくがん)を拝し、警咳(けいがい)に接する栄誉に浴したものだと思う。

このように米吉郎は五代の事業の設立の全てに関わる一方で、幕末以来の新しい永見商店の基礎固めと発展に心を砕いた。長崎の兄の永見商店と連携をとりつつ大阪でも朝鮮支那貿易を行い、米、大豆、松脂、牛皮、海産物、銅などを取り扱っていた。また金融業も行っていた。これは長崎本店が江戸時代から金融業や薩摩藩その他の藩への大名貸を行っていたのでその知識と経験があつたからである。又輸出商品に対する金融も大事な業務であつた。五代は人力車で近くを通るたびに立ち寄って気軽に打ち合わせをしたのだ。

大阪市史第七巻の明治十九年四月調べ五万円以上の資産家として、次の名前を挙げている。質商、銅商として、又外国貿易に従事する者、又企業家として松本重太郎、住友吉左衛門、柴川又右衛門、芝川新助、小西平兵衛、杉村正太郎、藤田傳三郎、田中市兵衛、肥田彌兵衛、塩野吉兵衛、安田源三郎、山口吉郎兵衛、岩井文助、武田長兵衛、兼松房治郎、殿村工三、三井元之助等々と共に永見米吉郎も名を列する迄になっていた。

十一年六月、大阪株式取引所創立に際して米吉郎は五代の指名で肝煎(今の専務理事)かとして設立と初期の運営に尽力した。(本紙第八号参照)。大阪商法会議所は九月創立総会を迎えた。設立準備の下働きをしていた米吉郎も当然式典の裏方を担った。

五代友厚の急逝

明治十八年(一八八五)九月二十五日午後一時、五代は東京築地の別邸で糖尿病のため急逝した。享年満四十九歳七ヶ月。妻豊子、長女武子(十四歳)その他多くの親族、友人、部下が大坂から上京した。二十七日朝、棺と喪主豊子、長女武子は数十名の一行と共に横浜港を出港し、翌日午後九時神戸港に着いた。神戸駅から

じつと見上げて「お母ちゃん、なんでこんなに
鳥が啼くのやろか」と母の袂をちぎれんばかり
に握りしめ二人は庭に立ち尽くしたのだった。
折から初秋の夕暮れに打ち出された鐘の
音があんまり淋しくて、きかん気の藍子もわ
あつと石の上に泣き伏してしまった。そこへ
電報が届いて、初めて父の死を知ったのだつ
た。最晩年の藍子女史が山中園子女史に語つ
た思い出である。勝は晩年を永見省一宅で過
ごし、昭和四年に亡くなった。

扈從(こじゅう)した執事

五代友厚葬列者名簿図表
五代没後 10 年目の
『商業資料』 筆者保有

碑墓古道
水兒米吉所
公元一九九九年

碑墓古道
水兒米吉所
公元一九九九年

五代成慶堂

所に入所して永
見傳三郎（二十
七歳）・米吉郎
（十八歳）兄弟と



がこの度(昭和七年)おんじよどん(お前さん)の孫娘慰(やす)と大阪で唯一の西洋式ホテルである今橋ホテルで結婚することによって芽出度いことじやのゝ「いやゝ、五代はん大きに、おおきに。そうと分かつていたらもつと京都に押しかけて祇園で遊んでおけばよかつたのになゝ、しかし會野氏は元々丹波の山国出身の堅物でしたなゝ」(終わり)



永見邸での省一・綾の家族
 右端が筆者母慰(やす)
 大正11年(1922)頃



永見邸での省一・綾の家族
右端が筆者母慰（やす）
大正 11 年（1922）頃

五代友厚と藍事業

Dream 五代塾顧問

上村 修三

(五代友厚顕彰会世話人)

五代友厚の

藍事業参入動機

八木孝昌は、鉾山業に専念すべき時期に、何故畑違いといふべき藍製造の事業化に乗り出したのか不思議である、と『新・五代友厚伝』に記している。

宮本又次『五代友厚伝』

に描かれた藍事業動機

宮本は、五代が藍事業に関わった理由として、「日本の国力を高めるための防衛策」「外貨獲得のための国家的プロジェクト」として次のように動機をまとめている。

「インド藍の脅威から国内産業を守る」「防排策」：明治初期、安価で染料濃度の高い「インド藍」が日本に大量流入し、伝統的な阿波藍などの国内市場を急速に圧迫。このままでは国内の藍作農家や関連産業が壊滅、多額の国富が海外へ流出してしまうと強い危機感を抱き、これに対抗するため従来の製法を近代化し、インド藍を国内から駆逐（防排）しようとした。

二、生糸・茶に続く「国際輸出品」の育成：当時、日本の主要な輸出品は生糸と茶に限られており、貿易赤字を解消するためには新たな「目玉商品」が不可欠。ヨーロッパの最新化学技術（機械化や沈殿藍の製法）を導入して高品質な染料を大量生産すれば、インド藍を凌駕する世界的な貿易商品にして、アジア・欧米市場への輸出を計画した。

三、土族授産と地方経済の救済：維新後、禄高を失い困窮の土族自立（土族授産）や、在来

産業崩壊に瀕していた地方（特に阿波地方）農民を救済することも大きな目的。近代的な製藍工場を興すことで広範な雇用を生み出し、社会の安定化をはかろうとした。

宮本は、五代の藍事業が「民間事業を超えた、明治政府の富国強兵・殖産興業政策」と完全に一体化した国家的大プロジェクトであったと論じ、藍事業は失敗したが、五代の藍事業への志を大きく評価している。

田付茉莉子『五代友厚』

に描かれた藍事業動機

田付は、五代の藍事業の目的は外貨獲得と国内産業保護を両立させる「富国強兵」の国家構想を実現するためであった、と次の4つに動機をまとめている。

一、インド藍の脅威と「輸入防圧」：明治初期、日本の伝統的な「阿波藍」は品質が不均一で、安価で質の安定したインド産の輸入沈殿藍（インディゴ）に圧倒されつつあった。五代はこのままでは国内の藍産業者が壊滅し、多額の国富が海外に流出すると強い危機感を抱き、インド藍を駆逐する（輸入防圧）ことが急務だった。

二、生糸・茶に続く「輸出の目玉商品」の開発：当時、日本の主要な輸出品は生糸と茶に偏っていた。五代は「日本の近代化（工業化）を推進するには、持続的に外貨を獲得できる新たな国際的商品が必要」と考えた。西洋の最新技術を用いて国産の「沈殿藍」を製造すれば、アジアや欧米市場へ進出できる一大輸出産業に育てられると目論んだ。

三、伝統産業の近代化：五代は単に古い産業を守るのではなく、渡欧経験で学んだ西欧の蒸気機関や有機化学的な知見を導入した「近代的な工場経営」によって在来産業を育成しようとした。大阪に最新鋭の「朝陽館」を設立し、全国から藍葉を集荷して均一な品質の藍を大量生産するシステムを構築した。

【図表】

	五代友厚の藍事業	藍関係の動向
1869	官職を辞し、実業界に転身。大阪を拠点に多角的な産業振興を開始	明治初期、安価で高品質なインド藍が大量輸入され、阿波藍の大きな脅威となる
1873		藍製造自由化、阿波藍師が4500人と3倍に膨張。阿波製藍業者、大阪市場に進出図るも不調
1874		国内の紡績業や綿織物産業が急速に発展、人々の衣服（着物や労働着）の需要が爆発的に増加。その大半が藍で染められたため、藍染料需要は過去最高 来日中の科学者アトキンソンが、街中に藍色の服が溢れているのを見て、日本の青を「ジャパン・ブルー」と称賛
1876	4月、「製藍精製の方法」特許出願 5月、勸商局へ「精藍製造之事業実際取調願書」や「藍製造概算取調書」を提出し、本格的な事業化へ動く 6月、勸商局より50万円借入 9月、大阪堂島に製藍会社「朝陽館（ちようようかん）」設立。最新の技術と機械を導入、従来の藍玉に代わる近代的藍製造を目指した 11月、次女誕生、自身の藍事業への想いから「藍子（あいこ）」と名付ける	阿波藍の技術が埼玉、千葉、愛知、北海道へと伝播し、日本各地で藍作が活発化
1877	2月、明治天皇の京都・大阪行幸の際、朝陽館へ行幸 11月、『朝陽館広告』掲載。インド藍に対抗して国産藍を振興する重要性を広く社会に説く。この頃、藍事業のピーク	
1882	業績が急速に悪化	
1883	朝陽館閉鎖	ドイツ化学者アドルフ・フォン・バイエルがインディゴの化学合成に成功
1885	9月、五代友厚逝去（借金100万円）	
1888		渋沢栄一が「小笠原製藍会社」を設立 この頃から、安価なインド藍（天然沈殿藍）の流入し、国内で価格競争激化
1897		化学メーカーのBASF社などが「インディゴ・ピュア」として商業生産を本格化
1902		人造藍（合成インディゴ）の本格輸入が始まり天然の阿波藍は太刀打ちできなくなり衰退。1907年以降、全国の染色工場は、化学染料に切り替え。天然藍の栽培面積は最盛期の1/100以下となる

四、阿波など地方生産者の救済：インド藍の台頭によって生計を脅かされていた、阿波をはじめとする国内の膨大な藍作農家や関係者に新たな活路を提供するという、社会救済事業であった。

八木孝昌『新・五代友厚伝』

に描かれた藍事業動機

八木は、五代には単なる一企業の利益追求ではなく、「インド藍の流入から国内の農業を守り、国産の沈殿藍を国際市場に輸出して国益をもたらす（富国）」という壮大な国家的・経済的防衛のビジョンがあった、と動機は次の3つとなる。

一、インド藍への危機感と国内農業の保護：当時、安価で品質が安定した「インド藍」が大量に日本へ流入し始め、このままでは、阿波藍等の日本の伝統的な藍産業者が壊滅、国力を支え

る農業が弱体化するという強い危機感を抱いた。

二、「沈殿藍」の国産化による国際市場の開拓：インド藍に飲み込まれるのをただ待つのではなく、インド藍を凌駕する高品質な「国産沈殿藍（精製染料）」を開発し、これにより、国内市場から外來のインド藍を駆逐するだけでなく、世界のマーケットで戦える日本の新たな「目玉商品」に育てることを目指した。

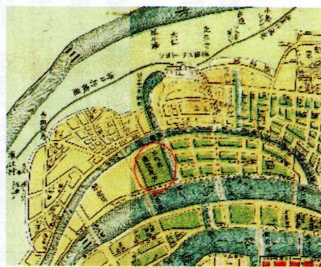
三、伝統的産業に携わる人々の「生きる道」の確保：明治維新により、旧來のやり方では立ち行かなくなった全国の藍農家・藍商人が、明治維新後にも藍による生計ができるような産業構造の近代化（救済策）を提示した。

八木の五代友厚論には、「利他の精神」と「富国（国益）」への強いこだわりがあった。五代の藍事業失敗について、「私利私欲を求めたからではなく、あるべき事業の完成形を初めから

藍事業計画(千円以下切捨)
 売上高73万円
 材料仕入高42万円
 生業加工諸経費5万円
 乾葉加工諸経費15万円
 建物及び機械3万円
差引利益7万円

※八木孝昌『新・五代友厚伝』より

求めすぎた(理想が高すぎた)結果である」とし、五代の目指す事業哲学は、「利他の精神」(自らの懐を潤すためでない)、「富国(国益)」「日本の近代化のための社会資本の基盤づくり」であったと強調している。



大阪古地図の「朝陽館」
 ○内に五代氏藍製造所と記、下方の広い川は堂島川、図の上方中に梅田ステーションと記

・五代の製藍業(朝陽館)の概要※歴史的変遷は「図表1」参照・設立年…1876年(明治9年)9月・設立場所…大阪・堂島(中之島付近)・開設資金…政府から50万円(現在の百億円規模)の巨額資金を借り入れ・従業員…300名超・敷地・設備…東西約150m、南北約200m、敷地面積約3ha。蒸気機関と近代技術を誇る大規模な国家的一大事業となる近代工場。

明治天皇が民間施設としては異例の「行幸」を行なった。アメリカの博覧会で褒章状授与されるなど品質は高く評価されたが、国内の流通網の複雑さや、精藍所で科学的に作られた藍染料は、従来の「染(すくも)」とは染色技術や使い方が根本的に異なり日本全国の伝統的な染め物職人(紺屋)たちが、使い慣れない新しい近代染料の採用を拒むなど、新製藍法の浸透がうまく進まず、政府からの借入金50万円の返済が滞り、「240



「朝陽館」跡地の五代友厚製藍所・西朝陽館碑(左)と明治天皇行幸碑(右)
 現 NTT テレバーク堂島2ビル

Dream 五代塾活動状況

Dream 五代塾セミナー実施

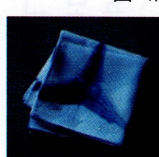
第27回 6月20日(土) 14時

八木孝昌氏著書『開学の祖 五代友厚小伝』第13話大阪商法会議所・大阪製銅会社などを教材に勉強会を進めた。

五代は明治2年(1869)7月に官を辞職、35歳で実業界に転身した。同年に大阪今宮で金銀分析所を開設、4年に奈良天川郷で天和銅山開設、事業拡大で弘成館(鉱山事業会社)を設立、9年に政府から50万円を借入、朝陽館(藍事業会社)を設立、次々と国の基盤となる事業を拡大した。生涯多くの事業

力月(20年)計画賦)での返納を願い出るほどに経営難となり、北海道開拓使官有物払下事件の風評、市場開拓の失敗、人造藍の台頭もあり、1883年に事業は解散となった。

五代友厚が想いを馳せた日本藍(藍染)は、三浦春馬主演映画『天外者』、三浦春馬著書『日本製』にも大きくとりあげられるなど、阿波・武州(埼玉)等での伝統的な技法の継承、環境に優しいサステナブル素材としての再評価、医療分野での利用、若い世代による新価値創造など、現代のライフスタイルに合わせて進化している。そして、今夏の「ニッパードカップ2026」で、ジャパンブルーが世界を舞台に躍動した。



上:三浦春馬著書『日本製』より
 左上:映画『天外者』の中でも使用された藍染め
 左下:健康維持、疫病予防、解毒の作用に着目し、医療目的でも広く利用されている

を立ち上げていったが(ここでは割愛)、いずれも国策に沿った「国益」増進を図る公益性の高い事業といっても過言ではなかった。

さて、五代が実業界に転じた世情はどのようなであったか。内政紛争、欧米列強の開港圧力、新政府下で制度改革などで政治経済共に混乱状態であった。特に「商人の町」特有の要因が多く、大阪経済への打撃は大きく衰退の一途であった。その理由は次の通り五つ挙げられる。①「蔵屋敷の廃止・接収」②「廃藩置県の大名貸権棒引き」③「御用金の負担」④「銀目廃止」⑤「株仲間解散」

五代は薩摩藩士として延べ10年の長崎在勤時の海外貿易や経済活動の実践、渡欧時の近代化産業の見聞・知識習得が大阪商人には無い発想とスケールで立て直しに役立った。

特筆すべき事業は、大阪商法会議所(現大阪商工会議所)の設立である。東京に半年遅れ、五代をはじめ有志15名の連署で出願、許可された。議員320名、リーダークラスは新興企業家であったものの旧来からの商人を含め、当時の大阪経済の大半の分野を網羅していた。

「下から」の動きで設立され大阪の事情を反映したものであった。

大阪商法会議所の活動は、当時一般の大阪商人の財界活動に対する理解の浅さもあった、必ずしも活発ではなく、五代もその運営に頭を悩ませたものと推測されるが、それを乗り越え今

大阪商工会議所の変遷

明治11年(1878)7月に設立願書を府に提出、準備等は朝陽館で行う
 8月に高麗橋通(御堂筋に近い)に大阪商法会議所設立
 五代友厚初代会頭就任(在任期間1878~1885)
 明治23年(1890)高麗橋通から堂島(朝陽館跡地)に移転
 明治24年(1891)大阪商業会議所へ改組 会員選挙実施
 昭和03年(1928)商工会議所法施行に伴い大阪商工会議所へ改組
 昭和18年(1943)商工経済会法施行に伴い大阪府商工経済会へ改組
 昭和21年(1946)商工経済会法廃止、社団法人大阪商工会議所設立
 昭和43年(1968)堂島から現在の大阪市中央区本町橋に移転

編集後記

6月が例年より雨が多く涼しかったこともあるだろうが、梅雨明け宣言と共にやってきた夏がやけに身体に堪える。その大阪天満宮の門前町から始まった日本一長いとされる4.6キロに及ぶ天神橋筋商店街に天神祭りが7月23、24、25日に行われた。暑い暑い夏に大阪は天満宮境内での龍踊りと、せわしのないお囃子、陸渡御、船渡御そして奉納花火でピークを迎える。五代さんはこの天神祭りの奉納花火を造幣局辺りで見ていたとの記述もある。この賑わしさが大阪の活気となり、経済発展に繋がっていたのをみて官を辞し大阪を東洋のマチマスターにするという夢が確実になってきているのを見ていたのだろうか？(由美子記)

(連絡先:川口建)
 ・Email:gogoken12345@gmail.com
 ・Tel:080-4497-5688
 ・HP:<https://www.dream-godai.com>



◆8月以降の予定
 ・8月の定例セミナー(偶数月第3土曜日は夏休みとします)
 ・9月25日(金)五代友厚公顕彰墓参会
 16時~16時30分(阿倍野公園に集合、自由参加)
 17時からミニセミナーと懇親会(要予約)
 詳細は9月に入り御案内します
 ・10月の定例セミナーは「まち歩き」を企画中

日一世紀半に及ぶ商工会議所の礎石を築いた功績は十分に評価されるべきである。(川口建)



・昭和18年戦時多難の秋、五代友厚の銅像は金属回収令のため惜しくも献納された。
 (上記写真右・明治33年建立)
 ・昭和28年大阪商工会議所創立75周年を迎えるにあたり再び銅像を建立することに決し、京都河原金吾氏に制作を委嘱した。銅像は元の場所(堂島)に建立し、同10月8日五代氏銅像再建除幕式を挙行了した。
 現在この像は、商工会議所が大阪市中央区本町橋に新築移転した際に移設され現在に至る。(上記写真左)